オプション教材（きょうざい）チカラシバ 暗唱長文集（あんしょうちょうぶんしゅう）

●暗唱の手順　１日分

・１日目は、まず、1の文章を３０回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。
　正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。
　イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。
　お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。
　１５回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ３０回続けて読んでください。
　なぜ回数を決めて繰り返すかというと、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。
　３０回音読しても暗唱できない場合は、もう１０回音読してください。
　これでその1の文章が暗唱できるようになります。
　それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

　暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。
　そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順　１週間分

・１日目に、1の文章を暗唱できるようにします。
・２日目は、2の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・３日目は、3の文章だけを同じように３０回音読し、暗唱できるようにしておきます。
・４日めは、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
・５日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・６日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。
・７日めも同じように、1、2、3の全部通して、１０回音読します。すると、1から3の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順　１か月分

・１週目に、1から3の文章を暗唱できるようにします。
・２週目は、もう1から3はやらずに、今度は4から6の文章を暗唱します。
・３週目は、同じように、7から9の文章を暗唱します。
・４週目は、1から9の文章を全部通して、毎日４回ずつ音読します。
・すると、１か月で1から9の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の１部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

　より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」（http://www.mori7.net/mori/mori/annsyou.html）をごらんください。

1「ほら、えさがなくなりかけているぞ」
　父の声が響きます。ぼくは、おととしから、フェレットを飼っています。フェレットというのは、イタチの仲間で、長い体をしています。ぼくのうちのは、タヌキのような顔をして、茶色とグレーの間のような毛の色です。2セーブルという種類で、最も多く飼われているそうです。どうして飼い始めたかというと、前に、動物病院の近くで、だれかがジャンパーの中に入れて歩いているのを見て、ほしくてたまらなくなったからです。お年玉やお小遣いを使わずに貯め、半分は父がお金を出してくれました。3父は、農家で育ったので、子どものころから動物に囲まれていたそうで、ぼくが生き物を飼うのは大賛成なのです。
　最近、サッカーの朝練で世話をさぼりがちなぼくに、父は言います。
4「お父さんは学校に上がる前から、ヤギの世話を任されていたんだ。きちんと毎日、乳搾りをしないとヤギの具合が悪くなる。絶対に休めない仕事だったんだよ。牛小屋の掃除も大変だった。夏なんかむんむんしてなあ。5ほかの友達が誘いに来ても、仕事が終わっていないと学校にも行けなかったんだよ。でも、飼われている動物は、人間が世話をしてやらないと生きていけないのだから、しんどくてもがんばったよ。」
　6ぼくより小さいころから、たくさんの仕事をしていた父はすごいなあと思いました。もしぼくだったら、寒い朝は起きられなかったかもしれません。父は、動物が好きだからこそ毎日がんばったのだろうなあと思いました。
7「お父さん、いやになったことないの？」
　父は笑いながら、
「まあ、いやになることもあったけど、動物は慣れてくるとかわいいもんだからなあ」
と、フェレットのえさを継ぎ足しながら言いました。8そして、

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

「お前は自分が飼いたいと言って飼い始めたんだから、どんなことがあっても、世話をさぼっちゃだめだな。」
と、ぼくの方を見ました。ぼくは、ちょっと反省しました。朝はきついから、今日から、夜寝る前に必ず世話をしようと心の中で誓いました。
9父は、フェレットに指を舐めさせながら、
「お父さんの田舎では、こういうのを『めんこいなあ』と言うんだ。このイタチはどういう生い立ちなんだろな、なあんて。」
と、目を細めました。
　ぼくは、もっともっと父の子どものころの話を聞きたくなりました。

（言葉の森長文作成委員会　θ）

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1「うまっ」

どうしてこんなにおいしいのでしょう。私は、つまみ食いの常習犯です。つまみ食いは、お行儀が悪いとされていますが、実は大事な仕事なのです。これは、よく言えば「味見」です。2味の足りないところや、直した方がよいところを事前に料理人に知らせることができるのですから。今日の料理人である母にも、感謝してほしいくらいなのですが、なぜだかいつも逆に怒られてしまいます。もたもたしていると、手の甲をペチッと叩かれます。3ああ、こわい。それでも、私と弟は、懲りずに毎晩任務を遂行します。敵がマーボー豆腐やカレーの時は諦めますが、たいがいの料理には挑戦します。得意分野は、揚げ物類です。これは大好物でもあるのです。

4中でも、今夜のようにフライドポテトがある日は、腕が鳴ります。おなかも鳴ります。次々に揚がってくる黄色いポテトたち。胸がワクワクします。母が後ろを向いて、次のポテトを投入している時はねらい目です。5テーブルにそっと近づき、目にも留まらぬ速さで、ポテトをつかみます。その様子は、まるでワニが獲物を後ろからパクッとやるようです。弟は、あちっと言ってしまったり、落としてしまったりと失敗しやすいので、私が弟の分まで取ってあげます。6私はたいがい、気付かれずに取ることができます。数が決まっているおかずの時などは、取られたことを気付かない母が「おかしいわねえ。」と、数が合わないと首をかしげることもあるほどです。

7たまに、見つかってしまってもちゃんと作戦があります。怒られる直前に、「す、ご、くおいしかったよ。」と言うのです。口封じの術です。気負いこんで、怒ろうとしていた母は、拍子抜けして「そ、そう？」となってしまいます。8私は心の中で大成功、と叫んでいます。父も実は仲間です。ビール片手にさり気なく、テーブルの脇をすり抜け、見ると、しっかりつまみ食いのつまみを持っているというわけです。

9この間、母に聞いてみると、「つまみ食いなんか、私はしたことないわよ。そんなはしたないこと。」と言うので、こっそりおばあちゃんに電話しました。すると「しょっちゅうしよったよ。揚げたてをつまんで、何度ヤケドしたことか。」と笑っていました。0

（言葉の森長文作成委員会　θ）

暗唱長文 小４ 9月　　歴史大好き

1「するってえと何かい？」

今日もそんなことを言って友だちを笑わせます。大うけです。

私は歴史の勉強が大好きです。最初におもしろいと思ったのは、テレビで江戸時代の風俗のことを紹介しているのを見た時です。2四畳半一間の長屋に、家族四人が暮らしていて、トイレは共同、お風呂は銭湯へ行く生活でした。とにかくご飯をたくさん食べて、おかずは朝、棒手振りの売りに来る、あさりや豆腐、納豆などです。3私の好きなコロッケや焼肉はありません。長屋は、何軒かの家がつながっていて、そこの人たちはみんな仲良しです。私は、その番組を見ているとき、江戸時代にタイムスリップしたような気持ちになり、すっかりとりこになりました。

4六年生のお姉ちゃんは、学校でも歴史の勉強をしているので、とてもうらやましいです。いつも社会科の資料集を見せてもらっています。土器の写真やお城の写真、歴史上の有名な人物の写真などが載っていて、いつまで見ていても飽きません。5原始人と言われる人々のいたころから、たくさんの時代がありますが、私がいちばん興味を持っているのはやはり江戸時代です。現代に近いということもあるのかもしれませんが、とても身近に感じられ、江戸時代の雰囲気がよくわかるような気がするのです。6中でも、私は、お城にいるお殿様やお姫様よりも、最初にテレビで見た町人の暮らしが好きです。当時、流行っていたものとか、普通の暮らしはどんなだったかとか、知りたいことが次々に出てきます。7一つわかると、また一つ疑問がわく、ということの繰り返しです。

お父さんは、

「好きな勉強があるなんてすごいじゃないか。どんどん調べて、博士になるといいよ。」

と励ましてくれます。8お母さんは、ちょっと心配そうに

「でも、歴史の本ばかり見て、学校の勉強を全然しないのは困るわねえ。」

と言います。そんなときもお父さんは、

「何かに一生懸命になれる人は、他のこともできるものだ。心配いらないよ。」

と言ってくれます。9そして私には

「将来、大好きな歴史を勉強するためにも、今の学校の勉強は基礎になるからしっかり授業は聞いておけよ。」

と、まじめに言った後、ニヤニヤして

「江戸はえーどー。」

とダジャレを飛ばしました。私も負けずにお気に入りの本を見せて

「ここに宝があったから」

とやり返しました。0

（言葉の森長文作成委員会　θ）